

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月30日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520021

研究課題名（和文）20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）

研究課題名（英文）Metaphysics in the 20th century(Heidegger, Wittgenstein, and Einstein)

研究代表者

細川 亮一 (HOSOKAWA RYOICHI)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：10091208

研究成果の概要（和文）：20世紀の思想を形而上学の視点から解明することができる。ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタインを形而上学者として描いた。20世紀の形而上学は、「形而上学（ハイデガー）対反形而上学（ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」でなく、「20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という枠組みとして捉えなければならない。何故ならウィトゲンシュタインは「哲学は論理学と形而上学から成り立っている」と言い、アインシュタインは自らを「形而上学者アインシュタイン」と呼んでいるからである。

研究成果の概要（英文）：Ideas in the 20th century can be elucidated from the point of view of metaphysics. Heidegger, Wittgenstein, and Einstein were described as metaphysician. Metaphysics in the 20th century cannot be understood as “metaphysics (Heidegger) versus anti-metaphysics (Wittgenstein, Einstein), but as “metaphysics (Heidegger, Wittgenstein, Einstein). Because Wittgenstein wrote “Phylosophy consists of logic and metaphysics”, and Einstein called himself “metaphysician Einstein”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：西洋哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学・哲学

キーワード：形而上学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、申請者のそれまでの研究がある。『ハイデガー哲学の射程』（創文社、2000年）、『形而上学者ウイトゲンシュタイン』（筑摩書房、2002年）、『アインシュタイン 物理学と形而上学』（創文社、2004年）。これらの研究はそれぞれ独自の成果を生み出したが、形而上学という解釈視点が一貫している。申請者は、これらの個別研究を有機的に結びつけ、20世紀の思想の展開を見直すことができる、と考えるに至った。本研究は、新しい新鮮な展望を切り拓くとともに、大学における申請者の研究の集大成である。

2. 研究の目的

研究の目的は、20世紀の思想を、ハイデガー、ウイトゲンシュタイン、アインシュタインを中心にして、形而上学という視点から捉え直すことである。

(A) 「形而上学は、概念把握することに対して、存在者を存在者としてかつ全体として取り戻すために、存在者を超えて問うことである」。

(B) 「哲学は論理学と形而上学から成り立っているが、論理学は哲学の基礎である」。

(C) 「本当の問題は物理学が一種の形而上学である(die Physik ist eine Art Metaphysik)ということです。物理学は『実在』を記述します。しかし我々は『実在』が何であるかを知りません。我々が実在を知るのには物理的記述によってです」。

(A)はハイデガーが一九二九年の就任講義『形而上学とは何か』において語った形而上学の定義である。(B)はウイトゲンシュタインが『論理についてのノート』（一九一三年九月）において書き記した哲学の定義である。そして(C)はアインシュタインがシュレディンガー宛の手紙（一九三五年六月一九日）において述べた物理学の核心である。

20世紀の思想を、ハイデガー、ウイトゲンシュタイン、アインシュタインを中心にして、形而上学という視点から捉え直すことができる。この三人を中心にすえて、三人の関わり、三人に影響を与えた思想家（哲学者、物理学者など）、影響を受けた思想家を辿れば、20世紀の思想が全体として見えてくるだろう。しかも形而上学という視点は、20世紀の思想をギリシア哲学以来の伝統のうちに位置づけることを可能にする。

3. 研究の方法

まず一九二九年から出発する。一九二九年に、一方でハイデガーの就任講義『形而上学とは何か』がなされ（七月）、他方でウィーン学団（論理実証主義）の宣言書である『科学的世界把握、ウィーン学団(Wissenschaftliche Weltanschauung: Der Wiener Kreis)』が執筆された（八月）。この『科学的世界把握』は反形而上学の宣言書であり、ここに「形而上学（ハイデガー）」対「反形而上学（論理実証主義）」という対立構図が成立する。『科学的世界把握』は最後に「科学的世界把握の指導的代表者」として三人の名を掲げている。アルバート・アインシュタイン、バートランド・ラッセル、そしてルートヴィヒ・ウイトゲンシュタインである。とすれば「形而上学

（ハイデガー）」対「反形而上学（論理実証主義）」は、「形而上学（ハイデガー）」対「反形而上学（アインシュタイン、ラッセル、ウィトゲンシュタイン）」となるだろう。ラッセルには立ち入らないとしても、「形而上学（ハイデガー）」対「反形而上学（アインシュタイン、ウィトゲンシュタイン）」という対立構図は正しいのだろうか。

ここで一九三〇年のシュリックに登場してもらおう。シュリックはウィーン学団の指導者であり、『科学的世界把握』はシュリックに捧げられている。一九三〇年にウィーン学団の雑誌『認識』第一巻が出版され、シュリックの論文「哲学の転回」がその巻頭を飾る。シュリックは「形而上学の消滅」を宣言し、ウィトゲンシュタイン『論考』のうちに「哲学の決定的な転回」（言語論的転回）を見、「偉大な探究者＝哲学者」の典型をアインシュタインに見ている。

しかしアインシュタインは一九三〇年一月二八日のシュリック宛の手紙において書いている。「物理学は実在世界とその合法的構造のモデルを概念的に構成しようとする試みです。……あなたは『形而上学者』アインシュタインに驚くでしょう。しかしあらゆる四足の動物と二足の動物は事実上この意味において形而上学者です」。自らを「形而上学者アインシュタイン」と呼ぶ者を反形而上学の代表者とすることはできないだろう。

「形而上学者アインシュタイン」と書かれた手紙を受け取った一ヶ月後、シュリックはハイデガーに対するウィトゲンシュタインの共感を知ることになる。ウィトゲンシュタインは一九三〇年一月三〇日にシュリック宅において、ハイデガー『形而上学とは何

か』について次のように語っている。「ハイデガーが存在と不安によって考えていることを、私は十分に思い描くことができる」。このように語る者を反形而上学の代表者とすることはできないだろう。

論理実証主義の宣言書『科学的世界把握』は、その哲学的支柱（論理実証主義の哲学の典型）をウィトゲンシュタインに、その科学的支柱（論理実証主義の科学の典型）をアインシュタインに求めた。しかしその期待は、形而上学者ウィトゲンシュタインと形而上学者アインシュタインによって裏切られたのである。

以上の考察から明らかになったのは、「形而上学（ハイデガー）対反形而上学（ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という対立構図でなく、「20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という枠組みとして捉えるべきである、ということである。

4. 研究成果

研究成果は「20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という表題でまとめ、一四一頁の印刷物とした。その目次は以下のようになっている。

序章 形而上学（ハイデガー）対反形而上学（ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）？

第一章 形而上学における「ある」（がある、である）への問い

第二章 不変量論

第三章 ハイデガー

第四章 ウィトゲンシュタイン

第五章 アインシュタイン

展望 20世紀の形而上学とカント

第六章 コペルニクスの転回

第七章 超越論的哲学

20世紀の形而上学の構図は「形而上学（ハイデガー）対反形而上学（ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という対立構図でなく、「20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という枠組みとして捉えるべきである（序章）。

ハイデガー『形而上学とは何か』は「何故、そもそも存在者が存在し、むしろ無ではないのか」という形而上学の根本的問いを問うことで終わっている。この問いはライプニッツに由来する。ライプニッツ形而上学は「ある」への二つの問いを問う。(1)「何故無でなく、むしろ或るものが存在するのか」。(2)「何故物がこのように実存し、別様ではないのか」。この二つの問いに定位して、20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）を見ることが出来る（第一章）。

さらに20世紀の形而上学は不変量論から光を当てることができる（第二章）。アインシュタインの特殊相対性理論は「ローレンツ変換群に対する不変量論（Invariantentheorie）」である。ハイデガーは相対性理論のこの基本性格を正確に捉えており、『存在と時間』への道において繰返

し論じている。ウィトゲンシュタイン『論考』における論理空間は不変量論として捉えることができる。

第三章はハイデガーの形而上学を主題とする。「形而上学は、概念把握することに対して、存在者を存在者としてかつ全体として取り戻すために、存在者を超えて問うことである」という『形而上学とは何か』の言葉のうちに、「存在論—神学」という形而上学の二重性、そして形而上学の統一を可能にする超越を読み取ることができる。この二重性をハイデガーは「基礎的存在論—メタ存在論」として構想した。この構想に定位して初めて、『存在と時間』の書き換えという問題を解くことができる。『存在と時間』は「形而上学の二重性から基礎的存在論へ」と「基礎的存在論から形而上学へ」という体系変容のうちで、初めて理解できる。そしてこの変容は、アリストテレスの「第一哲学」テーゼの問題圏のうちの動いている。形而上学の二重性とその統一への問いこそが、ハイデガーの思惟の道の一つの道たらしめている。

「哲学は論理学と形而上学から成り立っている」という『論理についてのノート』のテーゼ（「哲学」テーゼ）は『論考』の哲学を規定している。まず「私の本は二つの部分から構成されている、つまりここで提示されている部分と、私が書かなかった部分である」というフィッカー宛の手紙（一九一九年一月/十一月）の言葉から出発して、倫理的なものをまったく含んでいない『原-原論考』を想定することによって、『論考』が二部構成として構想されていることを確認する。

『論考』が論理—倫理の二部構成であることは、「論理は超越論的である」（6.13）と「倫理は超越論的である」（6.421）という平行的なテーゼが示している。超越論的=超越的=

形而上学的であり、論理—倫理の二部構成は、形而上学の二重性を意味する。論理—倫理の二部構成は「哲学」テーゼの実現であることが証明される（第四章）。

第五章はアインシュタインの形而上学に関する三つの言葉（一九三〇年のシュリック宛の手紙、シュレディンガー宛の手紙（一九三五年六月一九日）、「重力の一般理論について」（一九五〇年））の解明を目指す。(A)「あなたは『形而上学者』アインシュタインに驚くでしょう」。(B)「本当の問題は物理学が一種の形而上学である(die Physik ist eine Art Metaphysik)ということです」。(C)「あらゆる真の理論家は、どんなに純粋に『実証主義者』と彼自身思い込んでいるとしても、一種のおとなしい形而上学者である、と私は信じている」。(A)と書いた背景を知るために、(A)の手紙が宛てられたシュリックとの関係を見なければならない。(A)の核心にあるのは「概念の創造としての形而上学」である。概念創造説によって(B)に光を当てることができる。(C)の「おとなしい形而上学者」は形而上学と反形而上学の間道の道を歩む。おとなしい形而上学者の信条は「自然は数学的に考えうる最も単純なものの実在化である」というテーゼとして表現され、「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」というヘーゲル形而上学のテーゼと対比することによって解釈することができる。形而上学者アインシュタインは老いたアインシュタインにすぎない、という反論に対して、量子力学に対するアインシュタインの批判が一貫していること、そしてアインシュタインのマッハ批判によって答える。

20世紀の形而上学を解明する試みは繰返しカント哲学に出会うことになる。序章は

「形而上学（ハイデガー）」対「反形而上学（論理実証主義）」から出発して、「20世紀の形而上学（ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、アインシュタイン）」という枠組みに至った。20世紀の形而上学を解明するという課題は、「20世紀の形而上学からカントへ」という課題を含んでいる。しかしさらに論理実証主義もまたカント哲学の伝統から出発している。形而上学対反形而上学（論理実証主義）という対立構図は、それぞれの対立項がカント哲学へ立ち返ることを要求している。20世紀の形而上学を全体として見直すために、カントへ立ち返ることが必要である（展望）。

20世紀の形而上学を捉えるために、カントに帰るといふ課題が生じる。それ故付論として、カント哲学を可能にしたコペルニクス的転回（第六章）、そしてカントの形而上学構想を超越論的哲学に焦点を当てて考察しなければならない（第七章）。こうした作業を通して、もう一度20世紀の形而上学へと立ち返ることができるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

細川亮一、コペルニクス的転回、哲学年報、査読無、第68輯 2009、pp. 73-107

細川亮一、最高善の促進は要請である、哲学年報、査読無、第69輯、2010、pp. 83-111

細川亮一、 普遍的法則になることを意志し
うる、哲学年報、査読無、第70輯 201
1、pp.99-131

細川亮一、カントとヒュームと現象学、哲学
年報、査読無、71輯、2012、pp.75-99

[学会発表] (計 件)

[図書] (計 0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細川亮一 (HOSOKAWA RYOICHI)

九州大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：10091208

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：